

【調査報告】

沖縄県久高島の年中行事 ハティグワティ

——2014 年から 2016 年の現状——

山 本 恭 子

はじめに

久高島は沖縄本島の南東部に位置し、南城市の安座間港から 1 日 5 往復の船便で本島との往来が可能である。現在の人口は約 270 名であり、実際に島で生活をしている人は約 170 名程度である。島には琉球七御嶽のひとつであるフボウタキがあり、神の島と呼ばれている。古くから神行事が住民の生活の中に息づいており、現在でもその多くが継承されている。1979 年には年間 28 の神行事が執り行われていた。

しかし、特に 12 年に 1 回執り行われる、島の女性が神女（ハミンチュ）として就任する儀式であるイザイホーは、久高島において大切な神行事のひとつであるが、1978 年に行われて以来、1990 年、2002 年、2014 年には行われていない。久高島に生まれ育ち、久高島の男性と結婚し、他の男性と関係をもったことがない女性にイザイホーを受ける資格が与えられ、イザイホーを受けた女性は神に祈ることができ、神行事を支えていた。

2016 年現在、久高ノロ、外間ノロ、根神（ニーガン）は不在であり、年中行事を行うことができる神女は現在 3 名と言われている。しかし、そのうち 1 名は高齢であり、主として若い 2 名の神女に支えられている。神行事においては神女が久高ノロや外間ノロの役割を代行しているが、できることとできないことがあり、古来のままの行事を執り行うことが不可能である。

久高島の男性は年齢によって神行事における役割が分けられていることが多い。男性は 15 才になるとンナグウナーと呼ばれ、正人（ショウニン）になるための準備期を迎える。そして、16 才になった正月に、外間殿において根神とノロに盃を捧げ、正人として承認される。正人は 16 才から 70 才までの男性を指し、年齢によって 16 才～20 才をシマリータ、21 才から 50 才をウブグロータ、51 才から 70 才を大主（ウブシュ）と呼んでいる。また、多くの神行事で司祭などの役割を担う男神としてのソールイガナシーは 2 名であるが、イザイホーを受けた女性を妻に持つ大主のうちで、おおむね年長者から順に毎年 1 名ずつ就任する。任期は 2 年であり、2 年目は兄ソールイガナシーと言われ、1 年目とともに行事を行いながら、様々なことを伝承していた。しかし、現在はソールイガナシーも不在のため、神行事での役割は区長が代行している。

現在、年中行事の中でも、旧暦の 8 月に行われるハティグワティと、シャクトウイを含めた旧



図1 久高島集落 地図

正月の行事は、村行事としてほとんどの島民が参加しており、観光客の見学や参加も可能とされている。本稿では、年中行事の中でも村行事として全員が参加して行われているハティグワティに筆者が参加し、島民の方々から教えていただいた事や参考文献をもとに解釈を交えながら記録した。

1. 現在のハティグワティについて

ハティグワティは旧暦の8月10日、11日、12日に行われており、八月マッティとも言われる。2014年、2015年、2016年に行われた内容をもとに、概要を表1にまとめた。

8月10日（旧暦）

朝がみ

朝がみとは朝に行われる御願を意味し、朝マッティとも言われる。午前10時ごろから神女と区長が久高ノロ家、久高殿、シラタルー（久高殿横）、外間ノロ家、外間殿、ファガナシー（外間殿横）、大里家をまわり、御願がおこなわれる。

スパサシ（写真1）

午後一番に各家でスパサシを準備して家屋の



写真1 スパサシ

表1 現在のハティグワティの概要

日時 (旧暦)	行事	場所	概要
8月10日 ハティグワティ 午前10時ごろ	朝がみ	久高殿・外間殿 など	神女による御願
午後一番 午後5時から	スバサシ 夕がみ グウルイ	各家 久高殿庭 久高殿庭	家屋の四隅にスバを差して悪いものから守る 神女によって健康祈願のティルルが歌われる 神女、島の女性による円舞、悪いものを追い払う意味がある
8月11日 ヨーカビー 午前10時ごろ	タキマーイ	外間殿 フボーウタキ	神女と島の女の子が外間殿を出発し、フボーウタキで健康祈願
午前11時ごろ	ボンウキヤーの 迎え	ボンウキヤー	区長と男性が、タキマーイから戻る神女たちを出迎える。神女たちのカチャーシー
午前11時半から 午後3時ごろ終了	神酒集め	外間殿出発 久高殿に戻る	島人が各家を回って神酒を集める
午後5時から	夕がみ グウルイ	久高殿庭 久高殿庭	神女によって健康祈願のティルルが歌われる 神女、島の女性による円舞、悪いものを追い払う意味がある
午後7時ごろ終了			
8月12日 テラーガーミ 午前7時集合 8時出港 11時半ごろ帰港 午後4時ごろ	アンティキヤー	漁港	正人たちによる追い込み漁 帰港後、捕れた魚を港で刺身にして 夕方の行事にて振る舞われる
	テラーガーミ	ハンチャアタイ ユーウラス浜 久高殿	大主(51から70才の男性)による 太陽神が島を守るという意味のティルルが歌われる。 最後にユーラス浜にて男性に刺身が振る舞われる。
	すもう大会	ユーウラス浜	その後、女性にも振る舞われる。

四角に差す。スバサシは島に自生する桑の葉とススキを束ねて作られており、家に入ろうとする邪気のような悪いものを追い払うためのものである。島の全ての家の軒先に見られ、その後の3日間はそのまま家を守っていた。また、この日は午後一番にスバサシを差した後は、仕事をしてはいけないと言われている。仕事をするると怪我や事故などの悪いことが起こると考えられている。8月は1年の間で悪い月であるが、中でもこの3日間は特に邪気が舞い込む悪い日と言われている。

夕がみ (写真2)

夕がみとは夕方に行う御願を意味し、タマツティとも言われる。久高殿庭に島人が集まり、午後5時、久高殿の前に2014年は3名、2015年、2016年は2名の神女が、座って鳳凰に捧



写真2 夕がみ～神女のティルル～

げる健康祈願のティルルが歌われた。ティルルとは神に捧げる祈りの歌である。村人は久高殿に向かって右側に男性、左側には女性や子ども、中央には神役を退任した女性たちと観光客が座った。

グウルイ (写真3)

神女のティルルで祀りが始まると、神女と島の女性たちによる「ナオトミ主」をはじめとした5曲程度の円舞が行われた。神女は白衣、女性は紺地のウチンシーをまとっている。円舞が終わると、村人による踊りや三線などが三々五々奉納され、中締めのカチャーシーのころにはリラックスした場となり、誰でも参加できる。見物人にはお茶やビールや泡盛が、「あえもの」または「さしみ」と呼ばれる大根のしりしり（しりしりと言われる調理器具を用いて細切りにしたもの）と刺身の酢あえものと共に振る舞われた。グウルイという言葉は狂うという意味があり、狂ったように踊ることで、悪しきものはね除けるという意味を持っている。



写真3 グウルイ

8月11日 (旧暦)

この日はヨーカビーと言われ、1年の中で最も悪い日と考えられている。

タキマーイ (写真4)

午前10時、外間殿にて神女による朝ガミの後、島で生まれ育った女の子が外間殿に集まり、神女に連れられてフボーウタキに向かった。フボーウタキでは神女が健康で島を守ることができるように、子どもが元気に成長できるように健康祈願がされる。これがタキマーイである。女の子は赤い着物を身につけるとされており、戦前までは赤い胴衣と袴を着用していたといわれているが、現在は、赤い柄の浴衣やTシャツなど赤い色を意識した服装で参加している。



写真4 向こうはフボーウタキに通じる道

2014年は1名、2015年は2名、2016年は5名の女の子が参加した。現在の参加者は修学未満の子どもであるため、母親が同伴しているが、その他の人は一切立ち入ることはできない。

タキマーイのときにフボーウタキのなかでは神女たちに神の光が降りてくるが、子どもは純粹であり、神様の光を受けて溜めやすいので、女の子たちに強い神の光を溜めて村へ持ち帰らせるという意味もある。

この日はフボーウタキに通じる道は封鎖され、タキマーイに向かう人以外の立ち入りは禁止される。

ボンウキヤー（写真5）

午前11時ごろ、日章旗と百足を模した旗を掲げた区長を先頭に、三線や太鼓を持った男性たちが一列に並んで久高ノロ家を出発し、ボンウキヤーで神女の戻りを待つ。

新生児が生まれた家は小さな百足旗を作って、子どもを抱いて参加している。

ボンウキヤーは地名で、集落の北部にあるフボーウタキへと向かう道の入り口であり、西は葬所、東はイシキ浜、南は集落である。そこへ神女たちが一列に並んで歩いて戻って来る。帰ってきた神女たちと島の人がカチャーシーを踊り、神女が持ち帰った神の光が出迎えた人々に分け与えられる。カチャーシーにはかき混ぜるという意味がある。神女が外間殿に戻り、タキマーイ（前出）を終えたことを神様に報告したあと、島人の三線演奏が奉納され、神女のカチャーシーに続いて島人がカチャーシーを踊った。

神酒集め（写真6）

午前11時半頃、外間殿から、太鼓、酒瓶、三線の順に行列をつくって、島の全ての家を回って神酒を集める。酒瓶はネットに入れられた大きな硝子瓶で、棒にぶら下げて2名で担ぐ。2014年は主として20代から40代の男性、2015年、2016年は中学生が担いだ。各家は泡盛を用意して待っている。各家に着くと、「酒三合 やーむされえの歌」、「お酒を3合出してください、そうすれば家を守りますよ」という

内容の歌が歌われ、泡盛を瓶にいただく。その後、三線の曲に合わせて家人がカチャーシーを踊った。再び、「お酒を3合いただきました」という内容の歌を歌って次の家に向う。

留守の場合は、家の上がり口に泡盛が置かれている場合もあるが、ない場合は「お酒を3合いただけませんでした」という内容の歌を歌って、次の家に向かう。担ぎ手も、三線も交代で行われ、3時頃までかけて全戸を回り、久高殿にもどった。

12時前から3時頃までの行事であるが、冷たい飲み物や食べ物（カタハランプー、芋葛アンダギー、天ぷらなど）が準備されている家もあり、それをいただきながら神酒を集めて回った。

カタハランプーは小麦粉とふくらし粉、塩、水を加えて油で揚げたもので、形が妊婦の腹部と



写真5 ボンウキヤー ～タキマーイから戻って来た神女を出迎える～



写真6 神酒集め ～外間殿から出発する～

似ていることからカタハランブーという名前がついており、縁起の良いもので、家庭で作られる祝菓子である。芋葛アンダギーは芋から作られた葛に砂糖や水を加えて丸めて油で揚げたのもである。

夕がみ

午後5時から久高殿庭に全島人が集まり、久高殿庭にて神女の健康祈願のティルルが歌われる。この日も前日と同じく島の女性によるグウルイが行われ、その後、島人の奉納芸、カチャーシーが繰り広げられた。

8月12日（旧暦）

アンティキヤー（写真7）

アンは網、ティキヤーは使うという意味があり、沖縄に古くから伝わる伝統漁、追い込み漁である。これは正人（16才から70才の男性）によって行われる。この日捕獲された魚は、夕方の行事の時に振る舞われる。漁は原則的には3回行われることになっているが、行事に必要な分だけ捕獲できるまで、漁は繰り返し行われる。早く大漁できれば、早く帰港することになる。



写真7 アンティキヤー ～追い込み漁の収穫を刺身にする～

朝7時頃三々五々、漁港に集まり準備を始め、4隻の船に分乗して8時ごろ出港、11時ごろ帰港であった。

船が港に戻る頃、漁港には漁に出なかった年輩の男性たちも集まり、魚をさばく準備をしている。水揚げされた魚は種類別に分けて山積され、ブダイやゴマモンガラなどの大きな魚は刺身にされた。小さなものは、漁に出た人が分けて持ち帰る。それでも余った分は売られる。ここで、大きな魚をさばくことができるのは年輩者であり、若い漁師は小さな魚をさばく。年長者を敬う厳格な観念が生きている。魚のアラはさばいた人が持ち帰ることができるので、それが人々の楽しみでもある。

テラーガーマ（写真8）

午後4時半頃から「大主（ウプシュ）」と呼ばれる50才以上70才までの男性たちが、ハンチャアタイ（集落の中心にあり、天と地を結ぶとされる場所）に集まり始められる。2014年は根人と8名の大主であったが、2015年は大主4名、2016年は大主5名であった。喪中の



写真8 テラーガーマ ～ハンチャアタイにて～

場合、神行事には出席できない習わしがあり、そのために2015年と2016年は参加できる者が少なかった。

ハンチャアタイで神女の祈りが捧げられ、神女が見守るなか、大主たちにより、日の丸の扇をかざしながらテラーガーミのティルルが歌われた。ここでのティルルは、この後行われる神事で歌うための練習であると言われている。終了後、テラーガーミを歌いながら行列でユーウラヌ浜に向かい、神事が行われた。ユーウラヌ浜での神事は女性禁制であり、男性だけで行われる。神事が終わると再び、三角モー（ユーウラヌ浜から上がってきた所にある三角形の広場）から一列に並んで、テラーガーミのティルルを歌いながら久高殿に戻った。久高殿の前に神女が座して祈りを捧げるなか、大主たちのティルルが歌われた。そこで神事は終わり、島の女性たちも加わり、円舞が行われた。その後、男性は平服に着替えてユーウラヌ浜に集まり、神酒と刺身をいただく。刺身は甘口醤油と酢で和えて、ビニール袋に入れて配られた。このユーウラヌ浜での行事は女性禁制であるが、ひとしきり行われた後は、女性も浜に入ることができ、神酒と刺身をいただいて、日没まで子どもたちの相撲大会が催された。

2. 1975年から1978年ごろのハティグワティについて

1975年から最後のイザイホーの年となった1978年ごろのハティグワティについて多くの文献があり、次のように記録されている。

8月10日（旧暦）

ソールイガナシーの各戸まわり

10日から12日の早朝まで、3日間かけて各戸回りがおこなわれた。ソールイガナシー（男神）がシナグナー（15才の男）2名を伴って各戸をまわり、タルマミキを徴収した。タルマミキは米と麦を炊いたものを発酵させて作る飲料で、行事のために各家で作られていた。

朝ガミ・タガミ

朝ガミは10時頃から、タガミは5時頃から、久高殿と外間殿で行われ、村人の健康祈願が行われた。

ビンヌスヌー

ビンヌスヌーとは鳳凰のことである。久高殿庭でタガミ終了後、チャティオージ（神扇）をかざした神女による円舞が行われた。

グウルイ

ビンヌスヌー終了後、タムトゥ以下の神女たちで踊られた円舞。終わると大主たちも加わりカチャーシーが舞われた。

スパサシ

各家でタガミが始まるまでに行われた。

8月11日（旧暦）

タキマーイ

全神女と5、6才から14、15才の娘が赤い胴衣、下袴を着て参加。外間殿からフボーウタキへ行き、健康祈願が行われた。

ボンウキヤーの迎え

根人、男神職者が根神旗を掲げてタキマーイから帰る神女たちを迎えた。昔は正人全員と新生男児が祖母に抱かれて参列した。

タガミ

村頭のウタイでタガミが開始された。

8月12日（旧暦）

アンティキヤー

正人たちにより追い込み漁が行われ、行事に使用する刺身が作られた。

テラーガーミ

大主が午後4時頃ハンチャアタイに参集し、ハニマンガナシー（男神）、アカツミー（男神）のリードによってテラーガーミのティルルが歌われた。根神が司祭でソールイガナシーも立ち会った。

3. かつて（1975年から1978年）からの変遷

ハティグワティにおいてかつて行われていたことを振り返り大きく変わった点は、タガミにおけるビンヌスヌーがなくなったこと、ソールイガナシーによるタルマミキ集めがなくなったこと、タキマーイでの女の子の参加者が減ったことが挙げられる。

かつてタガミのときに行われていたビンヌスヌーという鳳凰の踊りは現在ない。この踊りはイザイホーを受けた女性が、イザイホーのときに受けたチャティオージ（神扇）をかざして踊る、神女による円舞である。イザイホーを受けた女性には神行事を行う役職が与えられるが、70才で役職を退く。その儀式をテヤクという。イザイホーを受けた女性が全てテヤクをしてしまった現在は、ビンヌスヌーを踊ることが出来る人はいない。

かつてはハティグワティにおいてソールイガナシーが3日間かけて、シナグウナーと呼ばれる15才の男子を2名連れて、各家からタルマミキを集めていた。現在、ソールイガナシーは不在であり、タルマミキ集めもされてない。かわりに「酒三合」と言われる、神酒として泡盛を各家から集めて回る行事が行われている。かつてはシナグウナーが神酒を担いで回ったが、2015年と2016年は中学生が神酒の瓶を担いで回った。

ハティグワティは旧暦の8月10日から12日と決まっていますが、神酒を集めるヨーカビーと言われる日は旧暦の8月11日と決まっており、2014年は9月4日（木）、2015年は9月23日（秋分

の日)、2016年は9月11日(日)であったが、2014年は平日だったので、中学生は学校に行くために祀りに参加できなかった。

タキマーイについても、かつては5才から15才までの女子があたりまえのように参加していたと言われているが、2014年は1名、2015年は2名、2016年は5名と増加しているものの、いずれも就学前の数名である。このような現状になっていることについては、現代の母親世代もイザイホーを受けておらず、島の神行事に興味を持っていない母親も多く、タキマーイに参加することが当たり前であった世代からの伝承が途切れてしまったのがひとつの原因ではないかと考えられる。また、タキマーイも旧暦の8月11日と決まっており、年によっては平日のこともあり、小学生、中学生の参加が難しいというのが実状である。

久高島ではイザイホーを受けた女性が神女(ハミンチュ)となり、神に祈る資格が与えられる。それぞれが神行事で決められた役割を果たし、行事を支えてきたが、1978年以来イザイホーが執り行われていないため、神女が高齢化し減少した。そして70才で神行事などの役割を退任するテーヤクを迎えるため、現在は神行事の役割を担うことが出来ない。

また、ソールイガナシーもかつてはイザイホーを受けた女性を妻に持つ大主が就任していたのだが、現在、ソールイガナシーは不在である。テーラーガミにおいても、司祭である根神、祭りをリードするハニマンガナシーやアカツミーが不在であるため、大主だけで行われている。

このように、神役に就任できる人がいなくなったことが、神行事を執り行う上での障害となっている。イザイホーができず、祀りを執り行う神女が減少したことで、かつて行われてきたとおりの神行事を維持することが難しくなっている。また、神行事は旧暦で行われるため、平日にあたる場合には子どもたちが参加できないことなども、これからの課題ではないかと考える。かつて、イザイホーを受けた女性や、ソールイガナシーを勤めた男性は、すでに高齢であるが、そのことを誇りに思っており、島民からも敬われている。そして島民は生活の中に神が存在する島の暮らしを大切に思い、神行事を守ろうとしている。

謝辞

この論文を作成するにあたり、多くの久高島の方々にお話を聞かせていただき、写真を撮影させていただき、ご指導いただいたことに深く感謝申し上げます。

参考文献

- 赤嶺政信(2014)「歴史のなかの久高島-家・門中と祭祀世界-」慶友社
- 当間一郎、友利安徳(1982)「神々のふるさと久高嶋 イザイホー・生活」沖縄公論社
- 比嘉康雄(1989)「神々の古暦①女が男を守るクニ 久高島の年中行事Ⅰ」ニライ社
- 比嘉康雄(1990)「神々の古暦②女が男を守るクニ 久高島の年中行事Ⅱ」ニライ社
- 比嘉康雄(1989)「神々の古暦⑤主婦が神になる刻 イザイホー [久高島]」ニライ社
- 比嘉康雄(1993)「神々の原郷 久高島 上巻」第一書房
- 比嘉康雄(1993)「神々の原郷 久高島 下巻」第一書房
- 比嘉康雄(2000)「日本人の魂の原郷 沖縄久高島」集英社

[やまもと ゆきこ 看護学]